

第1章

ニカラグアの国土



太平洋側のポネロヤ海岸



カリブ海側のプエルト・カベッサス

一 国土・風物

ニカラグアの国土は、日本と似たところが多々あり、火山や湖沼が多く風光明媚で、温泉が湧く。モモトンボ火山は富士山とそっくりの形をしており、地震が多く、またハリケーンと呼ばれる台風に当たる暴風雨は毎年上陸する。一九七二年のマナグア大地震は死傷者二〇万人という壊滅的打撃を与え、一九九八年のハリケーン・ミッチは大被害をもたらした。一方、緯度が低いので（北緯一〇・四五度から一五・〇五度）蒸し暑く、熱帯から亜熱帯の動植物が豊富に棲息し、首都マナグアの年間平均気温は約二七℃ある。

中米に位置するニカラグアは、北にホンジュラス、南にコスタリカと両国に挟まれ、東西は、



写真1. モモトンボ（左）とモモトンビート火山

太平洋とカリブ海に接している(図1)。国土面積は約十三万平方キロ、日本の約三分の一に相当し、人口は五一四万人(二〇〇五年国勢調査)。大きな湖は二つあり、マナグア市に接するマナグア湖と世界第一〇位のニカラグア湖である(図2)。マナグア湖の北西には姿の美しいモモトンボ火山、そのすぐ近くのマナグア湖内に相似形の小型火山(モモトンビート)が並んでいる(写真1参照)。ニカラグア湖は琵琶湖の一二倍あり、サン・ファン河を通じてカリブ海につながっている。この湖には淡水のサメやノコギリエイ(写真2)がいることで有名である。これは、大昔ニカラグアの西側海底が隆起して海を閉じ込めたからという説と、サン・ファン河がカリブ海に繋がっているので遡ってきたという二説がある。また、この巨大湖には大小五〇〇以上の島が存在し、オメテペ島はコンセプシオン(写真3)とマデラスの二つの火山で有名、また湖南のソレンティナメ群島は美しい風景と独特の絵画(素朴画)で知られている。この素朴画(写真4)は、八〇年代にカトリックの神父たち(エルネスト・カルデナル等)が、「解放の神学」といういわゆる左翼思想により農民たちを指導した際に生れた芸術運動に端を発している。

人口五一四万人のうち人種構成は、白人約一七%、黒人約九%、先住民(ミスキート、スモ、ラマ等)約四%、混血約七〇%といわれ、太平洋側にはスペイン系を中心とした白人と



写真2. ノコギリエイの剥製



写真3. コンセプション火山

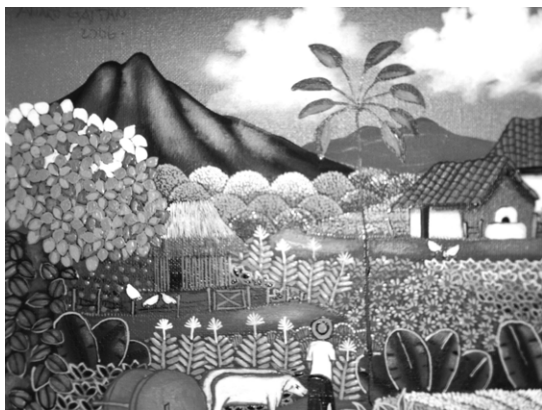


写真4. 素朴画（アルパロ・ガイタン作）

混血が、カリブ海側に先住民と黒人を中心とした人々が住んでいる。黒人系はかつてアフリカからカリブ諸国に奴隷として連れてこられた人々の一部が中米にわたったといわれ、ガリフナと呼ばれてアフリカ文化を継承している。その結果、国家が東西に二つに分かれているような形になっていて、実際カリブ海側は、自治区（北大西洋自治区、南大西洋自治区）を構成している。公用言語はスペイン語であるが、カリブ海側では英語やミスキート語等も話されている。

首都マナグアは、約九四万人が住む大都会だが、一九七二年の地震により壊滅的打撃を受け、その後高いビルなどの建設規制により全体的に横に広がる平坦な街である。現在徐々



写真5. マサヤ火山

に高層ビルが建ちつつあるが、中心のない街で、野原がいたるところにあるといった景観だ。後述するように八〇年代の土地収用により、地権の定まらない土地がたくさんあり、そのために都市計画や建物建設ができないといった事情もある。また、市内にはティスカパとアソスカのカルデラ湖があり、同市は火山帯の真上に位置していることがよくわかる。すぐ南のマサヤ火山(写真5)は現在も噴煙を上げる活火山である。大統領府の隣に七二年大地震の被害を受けたサンティアゴ教会(旧マナグア大聖堂、写真6)が現在もそのまま残されているが、なかなか立派な建物で往時の繁栄が偲ばれる。ニカラグアでマナグアに次ぐ都市は、レオン(人口一七万人)、マサヤ



写真6. 旧マナグア大聖堂

(同一四万人)、マタガルパ(同一三万人)である。

観光地としては、太平洋岸南のサン・ファン・デル・スル、ニカラグア湖内のオメテペ島とソレンティナメ群島(写真7)、カリブ海の島コーン・アイランド(写真8)がとくに有名である。

ニカラグアには、我々日本人に珍しい動植物が生息している。植物では、ヒカロがあり、これは実が木の幹に直接生るもので、リングのような緑色の実が幹にいくつも付いている姿はとても奇妙である(写真9)。殻がひょうたんのように食器などに利用できるほか、実の部分はジュースや果実酒になる。国花はサクアンホチェ(プルメリア)といわれる



写真7. ソレンティナメ群島



写真8. コーン・アイランド

第1章 ニカラグアの国土



写真9. 幹になるヒカロの実



写真10. ロブレの花盛り



写真11. 散歩中のイグアナ

木に咲く白い(桃色、オレンジ色もある)花。ロブレまたはサバナナの櫨といわれる木は落葉樹だが、暑い二月にピンク色の花が一斉に咲き日本の桜のようでもきれいだである(写真10)。また、北部の山岳地帯には松の木も生えていて、日本と同じようにシンコ・ピノス(五本松)という地名があるくらいだ。さらに庭にバナナ、パイナップル、パパイヤ、マングーなどを植えている家が多く、果実を食べるのが楽しみになっている。また、ピタヤ(ドラゴン・フルーツ)といったサボテン科のフルーツや甘酸っぱいスターフルーツ(輪切りにすると五芒星の形になる)もよく好まれている。

動物ではイグアナが代表的で、緑イグアナ



写真12. 一休みのチョココ

と黒イグアナ(写真11)がいる。黒イグアナは肉がおいしいといわれている。アルマジロも食べる。しかし、現在では両者とも保護の観点から捕獲禁止になっている。小鳥ではチョココ(写真12)といわれる緑色のスズメぐらいの大きさのインコがよく飛んでくる。国鳥はグアルダランコといわれるラケット状の尾を持ち色のきれいな鳥(ハチクイモドキ、*mounot*の一種、目の上に水色の鮮やかな線がある)。なお、ニカラグアの牛はコブ牛、すなわちセブ種で、人口数の約半分にあたる二六〇万頭の牛が飼育されている。

二 歴史・政治

一五〇二年にコロンブスの探検隊が中米のカリブ海側、ホンジュラスやニカラグアに到達した。一五二二年にはヒル・ゴンサレス・ダビラによってニカラグアの探検が行われた。そして、フランシスコ・エルナンデス・デ・コルドバによってグラナダ（一五二四年）とレオン（一五二五年）が建設された。一五七三年からニカラグアはグアテマラ総督府によって統治されたが、グラナダとレオンは前者が保守派、後者が自由派として争いが絶えなかった。一六一〇年には、モモトンボ火山の大爆発がありレオンは壊滅した（この遺跡はポンペイに似てUNESCOの世界遺産に登録された）。また一七〜一八世紀にかけてグラナダは、ニカラグア湖、サン・ファン河でカリブ海につながっているため、イギリス、スペイン、オランダ、フランスの海賊の標的にされた。それを防ぐためサン・ファン河中流のエル・カステイロ（写真13）に砦が一六七五年に築かれた。一七八〇年にはイギリスの若きネルソン提督がエル・カステイロを攻撃して敗れている（ニカラグアでは、このとき彼は右目を失明したと伝えられている）。なお、カリブ海側のブルーフィールドとコスタリカ国境近くのグレイタウンは一七四〇年に建設された。それ以来一九世紀後半までカリブ海側はイギリ



写真13. エル・カステイヨの砦

スの強い影響下にあった。

中米は一八二一年九月一日にスペインから独立し、ニカラグアの共和国としての完全独立は一八三八年であった。レオンとグラナダの勢力争いもピークを迎え、一八五四〜五六年の内戦ではレオン側が米国人の傭兵ウイリアム・ウォーカーを雇い勝利した。ウォーカーは五六年に自ら大統領を宣言し、約一年間ニカラグアを統治した。ウォーカーは五年にサン・ハシントの戦いに敗れ、後にホンジュラスで銃殺された。レオンとグラナダの覇権争いに終止符をつけるため、一八五七年に両者の中間点にあるマナグアが選ばれて首都となった。

ちようどこの時期カリフォルニアではゴ



写真14. 滔々と流れるサン・ファン河

ルド・ラッシュユ（一八四八〜五八年）が起き、人々はカリフォルニアに殺到した。まだ大陸横断鉄道がない頃なので米国東海岸の人々はニカラグア・ルートでサンフランシスコに渡った。この点はあまり知られていない。ニューヨークからカリブ海側のグレイタウンまで旅客船で行き、ここでニカラグアに入りサン・ファン河（写真14）を船で遡った。サン・カルロスに着きそこからニカラグア湖を横断して現在のリバス市周辺に上陸、さらに馬車で太平洋岸に出て次に旅客船でサンフランシスコまで北上するという長い行程であった。よってグレイタウン（一八四八年に英国はここを再度占領）には、各国の領事館が四〇カ国以上でき栄えたといわれる。米国の富豪として知

られるコーネリアス・バンダービルトはこの旅客船会社を持ち、財をなしたのである。作家のマーク・トウエインもこのルートを通ってサンフランシスコに行ったといわれる。余談になるが、現在ニカラグアで一番の富豪といわれるペラス家（砂糖工場、ラム酒工場を持ち銘酒「フロール・デ・カーニャ」を生産）は、初代がイタリアからグレイタウンに一八七五年に来て定住した。

ちなみに米国の大陸横断鉄道は一八六九年に完成した。それに先立ちパナマの横断鉄道も一八五五年に完成、またパナマ運河は一九一四年に開通した。このパナマ運河開通により、ニカラグア・ルートは完全に廃れることになった。グレイタウンは歴史の中に埋もれてしまう（写真15）。現在でもマナグアからグレイタウン（現在名サン・ファン・デ・ニカラグア）への陸路のアクセスはない。マナグアからサン・カルロスまでプロペラ機で飛び、そこからパンガ（小型モーターボート）で約八時間かけてサン・ファン河を下るか、あるいはヘリコプター（写真16）で直接行くしか方法はない。この地域は現在インディオ・マイスという広大な自然保護区になっている（インディオ河とマイス河の二つが同地区を流れているのでそう呼ぶ）。なお、パナマ運河を作る時もサン・ファン河を利用したニカラグア運河計画は検討され、さらに現在でも同国の運河建設計画は時々浮上している。



写真15. 朽ち果てた浚渫船（グレイタウン）



写真16. ヘリコプターからの風景



写真17. 今も残るパンチート飛行場

一九一〇〜三三年の間は、ニカラグア人の大統領が立ったが、実質的に米国が介入して海兵隊が統治した。これに反対してアウグスト・セサル・サンディーノが抵抗運動を展開、海兵隊を追い出すことに成功するが、本人は一九三四年に捕えられ殺された(英雄としてニカラグアでは伝説的人物であり、サンディニスタ民族解放戦線FSLNの名前も彼に由来する)。一九三六〜七九年の間は、ソモサ一族が3人の大統領を出し四三年間独裁統治した。この圧政に立ち向かったのがサンディニスタたちで、オルテガ兄弟、トマス・ボルヘ、レーニン・セルナ等がサンディニスタ革命軍を率いて抵抗、一九七九年に勝利した。

サンディニスタは、キューバ型社会主義を

導入し、土地収用や民間企業の国有化を行った。大土地所有の比率は、五二%から二一%に激減し、当初主要一二〇企業が国有化された。また、外交的にはソ連、東欧諸国等と外交関係を深め、ソ連はニカラグアを中米の社会主義の拠点とすべく軍事援助をした。この時ソ連のミグ21戦闘機を同国に入れようとしてマナグア湖東岸（パンチートと呼ばれる）に三〇〇〇メートル滑走路を有する大飛行場を建設した。正にキューバ危機の二の舞が起きようとしたのであった。実際にはこの計画は幻に終わり、現在もその雄大な滑走路を残し荒れ果てたままになっている（写真17）。

一方、こうした社会主義革命に反対する人々は、コントラ軍（反政府ないし反革命軍を指す）を結成し、米国の助けを借りて抵抗した。ニカラグアは内戦状態となり、三万人以上が死亡し六万人以上が負傷した。また、両軍によつて対人地雷は二五万発近くが埋められ、貯蔵地雷も一三万発以上あった。ダニエル・オルテガは一九八五〜九〇年に大統領となるが、内戦により経済は疲弊しインフレは二万%を超えた。コスタリカのリアス大統領等による中米和平合意（エスキプラス合意、一九八七年）を経てニカラグアは一九九〇年に大統領選挙を実施、ビオレッタ・チャモロ女性大統領が誕生した。

チャモロ大統領は、民主主義、経済自由主義を標榜して民主化に努めた。直面した三大

問題は、インフレの収束、軍の縮小（コントラ軍の解体、サンディニスタ軍の大幅縮小）、国有化した土地の元所有者への返還であった。前者二つはなんとか解決するが、土地問題はなかなか解決せず現在まで尾を引くことになった。地雷問題も深刻だ。九三年から本格的に地雷除去が始まったが、九三〜二〇〇五年間で地雷による死者は八〇名、負傷者は八六九名に上った。二〇〇五年までに貯蔵地雷のすべてならびに埋蔵地雷のうち十三万発近くが日本などの協力で処理されたが、まだ現在でも地雷フリーにはなっていない。

九六年の大統領選挙ではマナグア市長であったアレマン（立憲自由党PLC）が勝利し、九七年一月からアレマン政権が成立。自由主義路線は引き継がれたが、九八年にはハリケーン・ミッチがニカラグアに多大の被害をもたらした。これをきっかけにニカラグアへの先進国援助が増えた。二〇〇一年の大統領選挙では同じく立憲自由党から出たエンリケ・ボラーニョス（アレマン政権の副大統領）が勝ち、二〇〇二年一月からボラーニョス政権が発足した。ボラーニョスは、アレマンを汚職の罪で逮捕し、二〇〇年の実刑（自宅拘禁）にした。オルテガは九六年、二〇〇一年の大統領選挙に出たが当選はならなかった。しかし、サンディニスタは国会議員や市長の数では一定数を保ち、また最高裁判所や最高選挙管理委員会、会計検査院等の執行メンバーとしても一定の勢力を保持してきた。オルテガ、アレマ

ンといった頭領たちが密室の談合によってこうした主要人事や特権をやり取りする構図は続いている。

そして二〇〇六年の大統領選でオルテガは一六年ぶりに再選を果たした。

三 経済

ニカラグアの経済は、二〇〇六年でみてGDPが五三億ドルでこれは中米の中ではベリーズに次いで小さな規模であった。財の輸出は約二〇億ドル、輸入が約三五億ドル、財政赤字（外国の贈与を除く）が約二億ドルであった（表1）。インフレーション（消費者物価指数）は約九%だが、最近は原油価格の高騰が影響している（二〇〇七年は一六・九%と推定）。ニカラグア経済のアクレス腱はエネルギー、とくに電力にあり七割五分を火力に頼っているため石油価格の高騰は、直に同経済を直撃する。二〇〇六年、二〇〇七年は停電や断水（揚水に電力を使用するため）が頻発した。電力開発を早急に水力や風力に、あるいは代替エネルギーに転換する必要がある。サトウキビからのエタノール生産や、アフリカ椰子を利用したバイオ・ディーゼル生産は十分可能性がある。

表1. ニカラグアのマクロ経済指標 2001-2007年

	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007/p
実質GDP成長率 (%)	3.0	0.8	2.5	5.3	4.3	3.9	3.8
一人当たりGDP (US\$)	792.9	767.6	772.0	829.8	893.9	958.5	1,023.4
物価上昇率 (消費者物価指数) (%)	4.8	3.9	6.5	9.3	9.6	9.5	16.9
財の輸出額 ^a (FOB) (100万US\$)	895.3	914.4	1,056.0	1,369.0	1,654.1	2,033.9	2,313.2
財の輸入額 ^a (FOB) (100万US\$)	1,805.1	1,853.0	2,027.0	2,457.4	2,956.1	3,450.5	4,078.0
貿易収支 (100万US\$)	-909.8	-938.6	-971.0	-1,088.4	-1,302.0	-1,416.6	-1,764.8
中央政府財政収支 (外国の贈与を除く) (100万US\$)	-403.7	-205.5	-254.5	-248.6	-252.5	-206.2	-176.5
外国からの贈与 (100万US\$)	95.8	106.5	137.7	148.3	163.1	209.8	212.6
為替レート (年平均) (コルドバ/ドル)	13.4	14.3	15.1	15.9	16.7	17.6	18.4
対外債務残高 (100万US\$)	6,374.5	6,362.7	6,595.8	5,390.6	5,347.5	4,526.7	3,384.6

^a これらの数値は自由貿易地区の加工用輸入財の輸入、および加工後の製品輸出額を含んでいる。

^p 暫定値。

出所：Banco Central de Nicaragua, Anuario Estadísticas Económicas 2001-2007.



写真18. シウナ産の金塊

ニカラグアは基本的に一次産品輸出国で、コーヒー、ゴマ、落花生、牛肉、乳製品、エビ、砂糖、ラム酒、葉巻等が主要産品である。バナナ、アボカド、玉ねぎ、ユカイモ、マンゴー、オレンジ等の野菜・果物も豊富で、また、最近では輸出加工区を利用した縫製品などの軽工業品も輸出されている。

鉱産物としてはわずかではあるが金が採れる。北大西洋自治区にあるシウナ、ボナンザ、ロシータを結ぶ三角地帯ならびにチョンタレス県のラ・リベルタの周辺からは昔から金が採掘された。近年の産金量は年産二五〇〇キログラムであった(写真18)。

同国の一人当たりGDPは約九六〇ドル(二〇〇五年の国勢調査により人口が五一四万人と従

来の推計値より低くなったため、一人当たりGDPは上方修正された。それでも国民は、平均して一日三ドル以下で生活していることになる」と、中南米ではハイチに次いで貧しい国であるが、一九五〇～六〇年代は日本の一人当たり所得より高い豊かな国であった。相次ぐ地震やハリケーンといった天災、政治の混乱や不幸な内戦といった人災により同国は貧しくなったといわれている。世界銀行は二〇〇一年に同国を重債務貧困国(HIPC)に指定し、貧困削減戦略ペーパーの作成、国家開発計画等の策定を指導し、その結果、二〇〇四年に同国はHIPC完了時点に達して、約四五億ドルの対外債務免除を認められた。日本も同年七月に約一二九億円に相当する円借款債務免除を行った。対外債務残高は二〇〇〇年に六七億ドルのピークに達したが、債務免除等により二〇〇六年は四五億ドルまで下がった(なお、一九八〇年代から最近までの同国の経済変動に興味のある読者は、英語の資料ではあるが、Misuhiro Kagami, "The Sandinista Revolution and Post-conflict Development—Key Issues", Discussion Paper Series No. 119, Institute of Developing Economies, August 2007 を参照。あるいは <http://www.ide.go.jp/English/Publish/Dp/> の同ペーパーを参照していただきたい)。